イスラーム世界研究　第 18 巻（2025 年 3 月）244–259 頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 18 (March 2025), pp.244–259

ミフラーブ風アーチのない礼拝用敷物
――ウズベキスタン・ボイスンの牧畜民による自家製ジョイナマズ――

志田　夏美*

The Prayer Rug without a Mihrab-shaped Arch:
Homemade *Joynamaz* by the Pastoralists in Boysun, Uzbekistan

SHIDA Natsumi

This study examines the design patterns of homemade prayer rugs (*joynamaz*) crafted by pastoralists living in the Boysun district of Surkhandarya oblast in southern Uzbekistan. These *joynamaz* lack the mihrab-shaped arch pattern, which is traditionally a characteristic of prayer rugs. Instead, they are adorned with “technical” symbols: mountain-shaped (zigzag) stitching and tassels, bi-colored lines along the edges created by stitching and/or weaving patterns that signify talismans known as *tumorcha*. From a functional perspective, specifically the role of the *joynamaz* in orienting the worshipper toward Mecca, it was found that the mountain-shaped stitching and tasseled decorations serve a purpose equivalent to that of the mihrab-style arches. However, when considering the making process, it was found that the essential symbol for their *joynamaz* was the bicolored line symbol (*tumorcha*). This motif is believed to have originated in indigenous animistic beliefs. In other words, the homemade *joynamaz* created by Boysun’s pastoralists represents an art form that symbolizes the fusion of Islamic and nomadic cultural traditions unified through the universal activity of prayer.

はじめに

ウズベキスタンのムスリム家庭に必ず存在するモノの１つに礼拝用敷物がある。それは、1日5回の礼拝を習慣的におこなう家人がいない場合にも備えられている。

ウズベキスタンで出会う礼拝用敷物は、製法という側面からみると、さまざまなヴァリエーションが存在する。たとえば、刺繍やパイル織り絨毯、平織り絨毯から作られたものがある。一方、デザイン的側面からみると、ある種統一されたパターンがある。それは、ウズベキスタンに限らず世界中のムスリムの礼拝用敷物に広くみられる「ミフラーブ」――モスクの内壁に設けられたメッカの方向（キブラ）を示すアーチ型（馬蹄型）の壁龕［森 2002: 307; 羽田 2002b: 1002］――を模した造形である。イスラーム絨毯に独特の模様として必ず言及されるこのアーチ型の文様は、杉村棟［1995: 84; 2002(2013)a: 276; 2002(2013)b: 473］によると、キブラの表象とは別に、信心深いムスリムに約束された「天国への門」とする考えも存在する。いずれにしても、ミフラーブを模したアーチの表現はイスラームの信仰を象徴するものとして礼拝用敷物と結びつけられている[1)]。

ところが、筆者の調査対象のウズベキスタン南部地域のスルハンダリア州ボイスン郡においては必ずしもそうではなかった。牧畜民家庭で手作りされている礼拝用絨毯には一般的なアーチの造形

*　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1）　とはいえ杉村［1995: 88］が指摘するように、絨毯にみられるイスラーム的な文様の象徴性が見いだされる対象は宮廷工房や大都会の工房の製品であり、遊牧民や寒村の生活様式のなかでは自家用絨毯の文様に「深い意味は求められない」。クルアーンには「汚れのない清潔な場所で」礼拝するように教えているのみで、礼拝に用いる敷物の素材やデザインに関しては何の規定もなく、生活レベルや状況に応じて自由に選択できる［杉村 1995: 99］。したがって、ミフラーブ風アーチの造形は礼拝用敷物の絶対条件ではない。

がなかったのだ。筆者は、最初ふつうの絨毯と見分けがつかず、所有者に1つ1つ名称を確認しなければ見過ごしてしまいそうだった。けれども、彼らは製作／所有者本人であるかどうかにかかわらず、迷うことなく礼拝用絨毯を見分けていて、どうやら何らかの目印が存在するようだった。それは一体どのようなものなのだろうか。それを明らかにすることが本稿のねらいである。さらに、その記号がなぜ一般的なアーチの造形ではないのか。先行研究の知見をふまえつつ独自の考察を試みたい。言い換えると、本稿の目的は、ウズベキスタン南部地域の牧畜民家庭で手作りされているミフラーブ風アーチのない礼拝用絨毯のデザイン的特徴を明らかにし、そこからかつて遊牧民であった彼らウズベク牧畜民[2]の信仰について考察することにある。

本稿は、主に筆者の臨地研究の成果にもとづいている。各事例は、ボイスン郡の絨毯作りの現況を調査するために、2022年6月から7月および10月から11月に計20日間、同郡村落部を中心に実施した広域的な調査の際に得たものである。本調査では、各マハッラ[3]につき1～2軒の家庭を訪問し、1軒あたり1～10点ほどの絨毯製品を撮影記録した。総数70点余りのうち、礼拝用絨毯は15点あり、クズルナウル村（Qizilnavr qishloq）[4]、ユコリ・マチャイ村（Yuqori-Machay q.）、ベシェルカク村（Besherkak q.）、プルハキム村（Pulhokim q.）、ラバト村（Rabat q.）、トゥダ村（To'da q.）で記録された（地図参照）。なお、製品の素材や製作年、名称などの視覚情報以外の記録は、ウズベク語に精通するタジク人通訳[5]を通じて聞き取りをおこなった。また、筆者は広域調査の後、2023年3月から2024年9月にかけてクズルナウル村にて参与観察型の定点調査をおこない、そこで絨毯作りの技術や社会背景に関する知見を得てきた。本稿は、同村での参与観察のうえに、前段の広域調査時の撮影記録資料をふりかえりながら論旨をまとめたものであり、とりわけ製法に関する説明はクズルナウル村にて見聞きした記録にもとづくものである点をことわっておく。

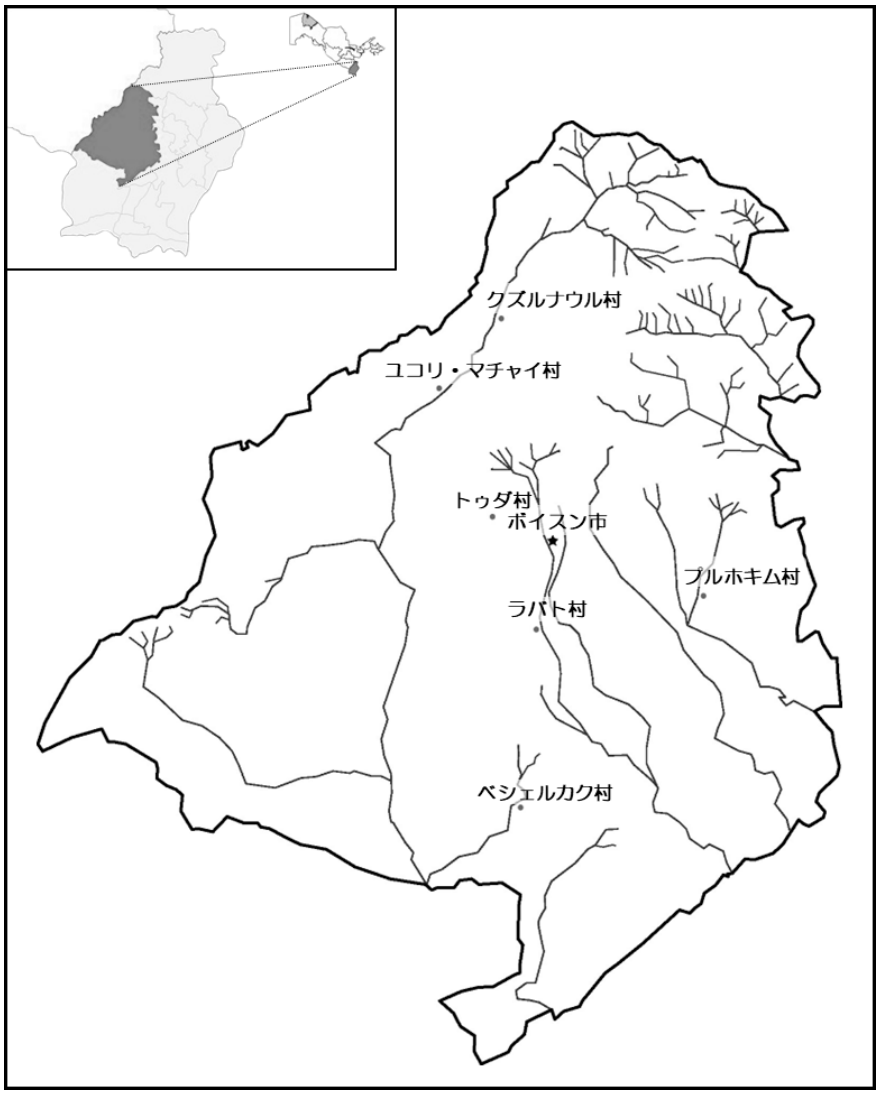
本稿は、次の通り3章で構成される。1章は、牧畜民の自家製の礼拝用敷物を調査対象とする意

2) ウズベク牧畜民とは、現在のウズベキスタンの領域（マーワラーアンナフル――アムダリヤとシルダリヤにはさまれた地域）に暮らしてきた遊牧部族集団とその末裔を連続的に指すために、筆者が提唱している用語である。これには、ソヴィエト期に現地調査を行った民族学者（以下「ソヴィエト民族学者」）B. Kh. カルムィシェヴァ［Karmysheva 1976: 66］の分類でいうところの「初期部族」、すなわちモンゴル以前のマーワラーアンナフルのテュルク部族およびモンゴルの征服・統治期のテュルク・モンゴル系部族の歴史的末裔のうち定住民の中に溶解せず半遊牧的な生活様式や氏部族的な区分を保持していた人々、そして「後期部族」、すなわち15世紀末にキプチャク草原からシャイバーニー・ハーンとともにマーワラーアンナフルに到来し、16世紀初頭に完全にここに定着したウズベク部族――いわゆる「遊牧ウズベク」を含んでいる。彼らの定住化の波は何世紀も前から始まっていたものの、定住的な生活様式の受容はとりわけ19世紀から20世紀初頭にかけて激化したといわれる［Gyul 2005: 248; Karmysheva 1980: 46］。

3) 「マハッラ」とは「現在のウズベキスタン共和国において行政の末端単位として機能している地域共同体」［ウマロヴァ 2015: 147］のことを一般的にいうが、ボイスン郡の各マハッラは1～数か村を束ねる行政単位として機能している。

4) 本稿におけるウズベク語の原綴は、1995年修正のラテン文字表記で示した。2018年以降、sh、ch、o‘、g‘ など2文字で表記されてきたアルファベットを特殊文字に変更する修正が毎年のように制定されているが、今なお独立後長らく使われてきた1995–2018年のラテン文字表記が一般に普及しているためである。また、ウズベク語は、他のテュルク諸語でよく生じる母音調和があまり見られないところがあり、母音調和が正書法にも反映されず、それが現代口語にも強く影響している点でやや特殊な言語である［淺村 2018: 218］。本稿におけるカタカナ表記は、できるだけ実際の発音に近いかたちになるように表記したため、原綴と音の対応が規則的でない点があることをことわっておく。

5) ウズベキスタンには、タジク語を母語――ここでは当事者が生育した家庭における第一言語という意味で用いる――とする人々が数多く暮らしている。とりわけサマルカンドやブハラといった歴史的オアシス都市の人口の多くを占めている。筆者の広域調査に協力してくれた通訳も、サマルカンド出身のタジク人（パスポート上の民族籍、以下「民族籍」）であった。彼の父親はサマルカンド出身のタジク人（民族籍）、母親はサマルカンド（タシュケントから移住してきたウズベク人マハッラ）出身のウズベク人（民族籍）とのことだった。家庭ではタジク語を話したが、大学進学にあたって母親やタシュケントに暮らす親族からウズベク語を習い、ウズベク語の課程を卒業し、その後に日本に留学した経歴をもっている。筆者の調査地であるボイスン郡も人口の半数近くを、タジク語を母語とする人々が占めており、郡下の村落ないしマハッラは主要な住民構成に応じてタジク人村落とウズベク人村落、ボイスン市（同様にタジク人マハッラとウズベク人マハッラ）から成る。広域調査の際に、筆者たちはウズベク人村落を中心に訪問したが、いくつかタジク人村落も訪問した。その際、通訳者は、地元住民の母語に応じてウズベク語とタジク語を使い分けるなど、マルチリンガルな活躍をみせていた。



地図　礼拝用絨毯を記録したボイスン郡の村々
ボイスン郡の詳細地図は Arapov, A. 2005. Boysun: Masterpieces of Central Asia, Tashkent: San´at Magazine Press, p. 3 掲載の地図をベースに、筆者が各村と市、河川の位置のみ抽出し作成した。ウズベキスタン全体とボイスン郡の位置を示した地図は Wikipedia の Boysun District のページ <https://en.wikipedia.org/wiki/Boysun_District> からダウンロードした画像を筆者が一部加工した。

義について明らかにするために、1 節で術語の定義をおこない、2 節で先行研究を概観し、3 節で本稿の位置づけを示す。2 章は、牧畜民の礼拝用敷物の特徴について具体的に示すために、1 節で家内工業による絨毯作りの概要を示し、2 節で 4 種類の技術的な記号について写真とともに例示する。3 章は考察として、ミフラーブ風アーチの代わりにどのような記号が礼拝用敷物の要素として認識されているのか、そこにあらわれる牧畜民の信仰のあり様について検討する。さいごに、結論と残された課題点をまとめる。

Ⅰ. 礼拝用敷物に関する先行研究と問い

1. 語句定義

これまで礼拝用敷物ないし絨毯という語句を用いてきたが、それらが対象とする範囲について定義を整理しておこう。

そもそも日本語の絨毯（絨緞）とは「羊毛などをパイル織りにした厚い織物。〔中略〕床の敷物などに使う」［松村編 2008］などと一般的な辞書に記されているように、敷物として用いられる動物性繊維による重厚な織物を指すことが多い。しかし、もともと遊牧民の生活用品であった絨毯製品には、敷物以外にも大小さまざまな袋物や可動式住居の帯類、カバーなどさまざまな用途のモノがあり、素材に関してもコットンやシルクなどウール以外から作られたものも多い。また、後述するようにパイル織りのほかにも平織りや刺繍など多様な製法が存在する。それゆえ、われわれ日本の文化社会に浸透している絨毯のイメージと現地のそれとは少なからぬちがいがある点にまずは留意したい。

本分野の先行研究は主にロシア語によって蓄積されてきた。そのため、作り手の生活言語であるウズベク語（ときにタジク語）のほかに、学術言語であるロシア語の用法にも配慮する必要がある。まず、ロシア語の kovep（単数形）および kovry（複数形）には、通常、絨毯や刺繍、フェルトの技法によって作られたものが含まれる。それゆえ日本語に訳すならば「敷物」とするのが相応しいように思われる。一方、ウズベク語の「ギラム」（gilam）は敷物全般を指す用語ではあるものの、刺繍の「カシュタ」（kashta）やフェルトの「キギズ」（kigiz）は通常、別に呼び分けられている。つまり、ギラムは日本語の「絨毯」という用語により近い用法であるといえる。ただし、ギラムにはパイル織りや平織りの技法のほかに、製品化の工程で刺繍の技法が組み合わされることもあり、その場合はふつうカシュタではなくギラムと認識される。以上から、本稿における絨毯という用語は、ウールに限らずさまざまな素材から、主に織りの技法によって作られた敷物を指すこととする。

次に、礼拝用敷物にまつわる用語についてふれておこう。礼拝用敷物の名称は地域ごとに異なり、アラブ諸国やトルコでは小さな礼拝用敷物は「サッジャーダ」（sajjāda）、大きく集合的なものは「サフサッジャーダ」（safsajjāda）ないし「サフ」（saf, アラビア語で「列」の意の ṣaff から）、イランでは「ジャーイナマーズ」（joynamoz）や「タギー」（tagi）、アゼルバイジャンでは「メフラビー」（mehrabi）または「ナマズルィク」（namozlyk）、中央アジアでは「ジョイナマズ」（joynamoz）、「ナマズリク」（namozlik）などと呼ばれている［Gyul 2023: 99, 200; Gyul' 2023: 65, 168; 2019: 167］。以上からわかるように、テュルク・ペルシア語文化圏には共通する用語が広く浸透している。語の構成要素についてウズベク語の知見から補足すると、「ジョイ」（joy）は場所や席など「ところ」を、「ナマズ」（namoz）は「（1 日 5 回の）礼拝」を、「リク」（-lik）は名詞を形容詞化するはたらきがある接尾辞で「〜用の」を意味する。したがって、ジョイナマズは「礼拝の（ための）場所」、ナマズリクは「礼拝用の（もの）」というような文字通りの意味合いになる。

2. 研究動向

上述のように、ウズベキスタンを含む中央アジアの礼拝用敷物は、製法によって大きく絨毯製品と刺繍製品に分けることができる。そのため、従来の研究は、絨毯の専門書と刺繍の専門書でそれぞれ別々にとりあげられてきた。ただし、各専門書のなかで数ページが割かれる程度であり、礼拝用敷物を主題にあつかった著作はあまり多くない[6]。博物館等の展示会を機に出版されるカタロ

6） 例外として、コーカサスの礼拝用敷物のみを解説した研究書として R. カッフェルによる『コーカサスの礼拝用絨

グのなかには、刺繍のジョイナマズの図版が比較的多く紹介されているが、1つ1つの標本情報と写真を掲載するにとどまっている（たとえばロシア東洋博物館刊行のカタログ［Myasina 2019］など）。つまり、礼拝用敷物は博物館等に比較的多く保管されている点で、標本資料という側面では十分な蓄積があるものの、学術的分析という側面では「礼拝用」という自明の事実以上にふみこんだ考察がとぼしい研究対象であるといえる。

そのような手薄な研究状況とはいえ、本稿にとって重要な示唆をあたえた先行研究が2つある。第一は、ウズベキスタンの刺繍製作やビジネスに携わる女性たちを対象に文化／社会人類学的な調査をおこなってきた今掘恵美による「ウズベク・ムスリムにおける礼拝用敷物とイスラーム信仰実践」［今堀 2012］と題する論文である。これは、ブハラ州村落部の刺繍のジョイナマズを事例に、製作や保管、破棄などの多様な局面を含むモノの使われ方に着目して、その製作者や所有者のイスラームの信仰実践のあり方を考察したものである。冒頭でふれたように、ウズベキスタンの家庭には必ずジョイナマズが備えられていることに関して、今堀は、1日5回の礼拝をおこなう習慣のない女性へのインタビューをもとに次のような見解を述べている。すなわち、「ウズベク人に重視される民族的美徳『もてなし上手（mehmon do‘st）』から、彼女は来客のなかに〔日常的に礼拝をおこなう――筆者注〕イスラーム知識人がいることを予め想定し、彼らが訪問先でも不自由なく礼拝できるように礼拝用敷物を準備している」。換言すれば、彼女にとって「礼拝用敷物の保管とはムスリムとしてイスラーム知識人の信仰実践に貢献する行為といえる」［今堀 2012: 54］。要するに、ウズベキスタンの家庭においては製作者や所有者自身が使用するか否かにかかわらず、ジョイナマズを準備（製作／保管）していること自体がある種ムスリムとしての信仰実践とみなされうる状況にあるということである。筆者は、自身の臨地調査を経て、今掘のこの見解を全面的に支持している。そこで、礼拝用絨毯というモノの製作や保管の局面を通して、その作り手である牧畜民の文化に目を向けようと考えたわけである。

第二は、絨毯と刺繍双方を含むウズベキスタンの伝統的なテキスタイルの専門家であるE. ギュリによる、ボイスン郡における現地調査をふまえた記述である。ギュリは、ウズベキスタン産絨毯を主題とする専門書をあらわし、これに「ジョイナマズ――シンボルと宗教的儀式の共通性（Dzhoinamaz: edinstvo simvola i rituala）」［Gyul' 2019: 167–176］と題する章を設け、全256ページのうち9ページを割いた。そこでは、ジョイナマズに用いられる素材や製法、デザイン的特徴に関して、3つの生産主体ごとに類型化がなされている。すなわち、礼拝用敷物は、宮廷御用達の職人による製品、都市や農村の定住民による製品、牧畜民（遊牧民）による製品に大別でき、それぞれの特徴は次の通り要約できる。まず、宮殿御用達の職人による製品は、プロの装飾芸術家の下絵にしたがって作られたもので、パイル織り絨毯であることが多かった。素材としては、ウールやシルクが用いられ、しばしば金糸や銀糸も織りこまれた。造形としては、クルアーンの引用文などをあらわすアラビア文字や優美な植物模様（アラベスク）とともにミフラーブのアーチが描かれていた。15〜19世紀のイランやトルコの宮殿の製品には、加えてランプの造形が描かれることもしばしばあった［Gyul' 2019: 167–170］。都市や農村の定住民（ウズベク人やタジク人）は、少なくとも19世紀には、絹や綿の布に刺繍を施したジョイナマズを作っていた。それらには、抽象的な花の装飾とともにミフラーブ（アーチ）の造形が描かれていた［Gyul' 2019: 172–173］。牧畜民によ

絨毯』［Kaffel 1998］がある。本書にはカッフェル夫妻が収集したプライベートコレクションのうち96点とヴィクトリア＆アルバート博物館所蔵の1点が掲載されている。付録として、J. ディクソンが「デザインとシンボリズム」［Dixon 1998］と題する短い解説を書き、特に礼拝用絨毯に描かれるデザインについて宇宙に対するイスラーム的観念の反映として分析している。

るジョイナマズの標本は数少ないが、パイル織りや平織りのウール製のものを作っていた。そこに描かれる造形は独特なもので、先端に雄羊の角を載せたアーチの造形が描かれた。これに関して、ギュリの言葉をそのまま引用すると、「ミフラーブの上にある雄羊の角は、ウズベク人、トルクメン人、カラカルパク人、クルグズ人、アゼルバイジャン人、トルコ人など、かつての遊牧民に連なるすべての民族の礼拝用敷物にある。イスラームの最も重要なシンボル（ミフラーブ）とその頂上を飾るトーテム記号（角）のこの組み合わせは、それ自体が文化的にナンセンスである。それと同時に、これは、テングリズム[7]（シャマニズム）とイスラームという2つの文化の異なる2種類の芸術的伝統が、かつての遊牧民の意識の中で完全に共存し、彼らの思考のある種の柔軟性を示した、最も輝かしい対話の実例でもある」[Gyul' 2019: 173]。このような角のアーチが描かれた標本のなかには、1枚の絨毯に1つのアーチではなく複数のアーチが並んで描かれた「集合的な」礼拝用敷物（サフ）もあった[Gyul' 2019: 174–175]。以上のように、宮殿の製品にはアラビア文字やアラベスク、定住民の製品には抽象的な花、牧畜民の製品には雄羊の角というように、生産主体によって彩り方はちがえどジョイナマズにはミフラーブを象徴するアーチの造形が必至なものであったことが窺える。

ところが、20世紀に入りジョイナマズが地方でのみ作られるようになると、とりわけ牧畜民の製品には変容がみられるようになった。ボイスンのユネスコ無形文化遺産登録にあたって2000年代にA. ハキモフとギュリを中心に編成された学術遠征隊は、訪問したすべての家庭でジョイナマズを記録した。その際、タジク人のもとにはコットン製の織物にシルクの糸で古典的な装飾（ミフラーブの龕）を施した刺繍製品があり、ウズベク人のもとにはコクマもしくはガジャリという平織りの技法（後述）で織られた製品があった。後者にはミフラーブの龕がなく、何らかの「技術的な」方法によって目印がつけられていたという[Gyul' 2019: 176]。

3. 本稿の問いと意義

ボイスン郡の牧畜民のもとでギュリらが記録した何らかの「技術的な」記号とは一体どのようなものなのだろうか。当時の調査報告としての刊行物[Khakimov and Gyul 2006; The Fine Arts Scientific Research Institute of the Academy of Arts of Uzbekistan et al. 2005]を含めて、具体的な例示や分析はくわえられていない[8]。そこで本稿では、この「技術的な」記号を明らかにすることを第一の目的に、その意味をウズベク牧畜民のあいだにみられる信仰のあり様として考察する。世界的にみても珍しいミフラーブ風アーチのない礼拝用敷物をとりあげることで、遊牧民のイスラーム

7) テングリズムとは、「天」または「神」を意味するテュルク語やモンゴル語の「テングリ」（tangri, tängri）を最高位とみなす古代信仰のことで、遊牧民の自然信仰を背景にシャマニズムと結びついた思想と考えられている。単于や可汗といった君主称号にその思想があらわれており、テングリは君主の権威や力、遊牧民にとっての美徳である勇敢さ、知恵、賢明さを生む源泉などと考えられていた[梅村 2005: 371]。ここでギュリがアニミズムではなくテングリズムとしている理由は、おそらく、雄羊の角がアーチの内側や下部に施されているのではなく、最も重要な頂部（人が平伏した時に額をつける部分）のさらに上――つまり天上に雄羊の角が載せられている点を強調したいからであろう。

8) ギュリは、ウズベキスタン共和国科学アカデミー芸術学研究所の主任研究員で、筆者の臨地調査にあたってのカウンターパートでもある。滞在期間中、筆者は常に彼女の研究指導を仰ぎながら調査や成果報告にあたっていた。本稿は、はじめにロシア語で草稿を執筆し、ギュリの指導を受けつつ作成したものが元になっており、現地受入研究機関でのウズベク語による口頭報告を経た後、日本語に書きなおしたものである。日本語に書きなおす際には、ロシア語原稿の段階から加筆修正した箇所があるものの（たとえば術語の定義や今堀の研究と主張――その根拠を詳述するだけの紙幅も、文化／社会人類学的な知見や議論の共有も不十分であったために、残念ながら書誌情報と対象地域などの簡単な紹介にとどまった）、問題定義と結論などの論旨は同じ内容である。ギュリは、筆者の関心に合わせてさまざまな文献を紹介し、時に私蔵の書籍や論考を惜しみなく譲渡してくれた。本稿の元になった草稿の作成時にも、彼女が知る限りの礼拝用敷物に関する論考を紹介してくれたが、それらのなかにも牧畜民の礼拝用絨毯の「技術的な記号」をとりあげたものはなかった。また、ウズベク語の口頭報告時には、ウズベキスタンの芸術学分野の大家といえるハキモフからコメントをもらったが同様であった。

化にまつわる事象の一例として、地域的あるいは民族的に独自に形成されたイスラーム信仰のあり方の多様性を明らかにする試みにつなげたい。

II. 牧畜民家庭のジョイナマズにみられる技術的記号

1. 絨毯作りの基本

技術的記号の分析に入る前に、ボイスンの牧畜民家庭で作られている絨毯製品について概要を述べておこう。

先述のように、ウズベキスタンの絨毯には、パイル織りや平織り、刺繍の技法が用いられる。パイル織りには、長い毛足をのこした「ジュルヒルス」（julxirs, アラビア語ないしタジク語で「熊の皮」[9]）という技法と、毛足を短くカットした「ギラム」（狭義）もしくは「ハリ」（holi）[10]という技法がある。平織りには、「コクマ」（qoqma）、「ガジャリ」（g‘ojari）、「テルマ」（terma）、「タキル」（taqir）という技法がある。これら平織りの技法で作られた絨毯は、総称的に「パラス」（palos）とも呼ばれる。すでにふれたように、製品化の段階で複数の技法が組み合わされることもしばしばあり、完成した製品は、通常、その広範囲を占める技法の名で呼ばれることになる。たとえば、「コクマ・ギラム」や「ガジャリ・ギラム」などという。

ガジャリ織りやテルマ織りはコクマ織りの変種の1つで、これら3種の平織りの技法には、古くから牧畜民のあいだに普及している幅の狭い水平型の織機が用いられる[11]。本稿で取りあげるジョイナマズもすべて、幅の狭い水平型の織機による平織りの技法から作られたものだった。最も頻繁に用いられる技法はコクマ織りで、ガジャリ織りやテルマ織りから作られたジョイナマズはそれぞれ1点ずつだった。こうした傾向は、ジョイナマズに限ったことではなく、ふつうの敷物などにもあてはまる。コクマ織りは最もシンプルな技法のため短期間で織りあげることが可能で、織り手に選ばれやすい技法なのである。

敷物を作る際には、糸紡ぎや染色など糸の準備作業、経糸を張る作業（整経と織機の設置）、織り作業、仕上げ作業の工程をたどる。狭い水平型の織機から得られる織り布の「タフト」（taxt）は、幅30〜40センチメートル、長さ数メートルから十数メートルの細長いものになる。そのため織り工程の後、任意のサイズに仕上げるために、タフトを同寸法の数枚に切り分け、織り耳同士をつきあわせるように並べて縫い合わせる。さいごに裁断面に何らかの縁加工を施して完成となる。

原料に関しては、ウール、コットン、シルクが用いられていた。本来は羊毛が容易に手に入るがゆえに牧畜民のあいだで絨毯織りが盛んにおこなわれてきたのだが、現在は綿花から紡いだ糸もしくは工場製糸から織られることも多い。織り手によっては用途に応じて原料を使い分けていること

9）ギュリ［Gyul 2023: 100］によれば、「どうやら、この一般的なジュルヒルスの訳は商人たちの間で創られたものであるようだ」。一方、中央アジア絨毯研究の第一人者であるソ連時代のV. G. モシュコヴァ［Moshkova 1970: 238］によれば、ヌラタ地区の職人たちはこの用語を「裕福な人の鞍の敷物」（jul, 鞍の敷物、hirs, 裕福な人）と訳したという。さらに、ウズベク・コンギラート人は、julvaraq（jul/yul, 道、すなわち絨毯の狭い織布（タフト）、varaq/baraq, ぼさぼさの羊毛、毛むくじゃらの犬の毛）という用語を使っていた［Gyul 2023: 100］。

10）トルコやアゼルバイジャンでもパイル織りの絨毯は「ハル」（halı）と呼ばれている。一方、ギラムとおそらく語源を同じくするトルコ語の「キリム」（kilim）は平織りの絨毯を指す用語である。このように、絨毯の技法をめぐる語彙は、地域によって異なる対象を指すことがある。たとえば、クズルナウル村のインフォーマントA（同村出身の60代女性）は、長い毛足のパイル織りを「ハリ」と呼んでおり、「ジュルヒリス」という呼称になじみがないようだった。

11）現在のウズベキスタンにおいては垂直型の織機（幅1メートルほど）も部分的に普及しているが、一般的な牧畜民家庭にみられるものではない。モシュコヴァ［Moshkova 1970: 237］によれば、垂直型の織機が中央アジアに導入されたのは1930年代の絨毯工場（アルテリ）において以来だったらしい。実際に筆者が現地でみた垂直型の織機は、たとえば商用の製品を作るために織り子を抱えているような工房の一角に設置されていたもので、たいていパイル織りやタキル織りに用いられていた。

もある。たとえば、自家用のジョイナマズにはウール、客用のジョイナマズにはシルクを用いたケースがあったが、筆者が記録したすべての絨毯製品のなかでもシルクから作られた製品はこの1例のみであった。なお、染色に関しては、基本的には化学染料が用いられ、自然染料のレシピを知る人は高齢女性に限られている。

2. 技術的記号

ボイスン郡村落部のウズベク牧畜民家庭の自家製ジョイナマズの写真を見比べると、他の敷物から識別可能な要素が4種類あることがわかった。それらは、製作工程に応じて、大きく2つのグループに分けることができる。第一は織り工程の前に施される整経にかかる技法(織り柄)、第二は織り工程の後に施される仕上げにかかる技法である。後者には、山型の縫いとり線、房飾り、縁飾り縫いの3種類の技法が含まれる。たいていの製品は、写真1のように、複数の技法の組み合わせによって作られている。

写真1. 4種類の技法がすべて施された4つ折りの状態のジョイナマズ(クズルナウル村、2023年5月7日撮影)

本節では、標本のなかで少なかった事例要素から順にとりあげていこう。

(1) 仕上げにかかる技法

山型(ジグザグ)の縫いとり線は、シェラバード川(Sherobod-daryo)上流域のマチャイ川(Machay-daryo)沿いに位置するユコリ・マチャイ村とクズルナウル村の製品にのみ見られた。ユコリ・マチャイ村の製品は、写真2と写真3のように、白黒の撚り紐を1つの山のように縫いつけることによって表現されていた。一方、クズルナウル村の製品は、写真4および既出の写真1のように、ラクダの毛をジグザグに縫いとることによって表現されていた[12]。これらは敷物の片側に施されており、礼拝者は、縫いとり線の方をメッカに向けて置く。

「パプク」(popuk)もしくは「トゥパク」(tupok)、「プパク」(pupok)などと呼ばれる房飾りは、地域的な偏りなく広く普及している要素だった。写真5のように敷物の上部にのみに施している場合と、

写真2. テルマ織りから作られた珍しいジョイナマズ(ユコリ・マチャイ村、2022年10月28日撮影)

写真3. ユコリ・マチャイ村のフナルマンド協会登録職人から購入したジョイナマズ(クズルナウル村、2022年7月2日撮影)

12) この縫いとり線には専用の名称がないようで、単に「ラクダの毛」(tuya-yun/jun)と呼ばれていた。

写真 4.　ラクダの毛でジグザグの縫いとり線を施した自家製ジョイナマズ（クズルナウル村、2022 年 7 月 2 日撮影）

写真 5.　ガジャリ織りから作られたジョイナマズ（クズルナウル村、2022 年 7 月 2 日撮影）

上下に施している場合があった。製法としては、写真 6 のように余り糸から作った小さくシンプルな房飾りを縫いつけている事例が多かった。礼拝者は、房飾りの数が多い方をメッカの方向にむけて置いて使う。

写真 6.　余った糸から作った小さな房飾り（クズルナウル村、2022 年 7 月 2 日撮影）

「トゥモルチャ・ティキシュ」（tumorcha-tikish）と呼ばれる縁飾り縫いは、ほとんどの自家製ジョイナマズに施されていた。「お守り」と「縫い」（「縫う（tikmoq）」の動名詞）を意味するその名の通り、呪術的な意味合いをもつと考えられている。多くは白と黒の 2 色の糸を数本ずつ交互にかがり縫いすることによって表現される。既出の写真 2 や写真 6 のように上下同じように配色されるものが一般的だったが、写真 7 のように上下の色数に差をつけたものが 1 例だけあった。作り手によると、礼拝者は色数が多い方をメッカの方向に置いて使うらしい（つまり、白と赤の 2 色の方が下側、青を加えた 3 色の方が上側と認識されている）。トゥモルチャ・ティキシュは、水平方向（裁断面）だけでなく垂直方向（織り耳）に施されることもある。写真 8 のように、垂直方向のトゥモルチャ・ティキシュは、向かい合った織り耳を引きよせるように 8 の字に運針し、途中で糸の色を替

写真 7.　トゥモルチャ・ティキシュの色数に差異をつけたジョイナマズ（クズルナウル村、2023 年 5 月 10 日撮影）

写真 8.　垂直方向にトゥモルチャ・ティキシュが施されたジョイナマズ（トゥダ村、2022 年 10 月 25 日撮影）

えることで踏切のような2色交互のラインが表現される。写真9のように、水平方向と垂直方向の両方に施したものもあった。これは、白、赤、ピンク、オレンジ、青緑、黒と多色を用いつつも、隣り合う色を対照的な配色にすることで、2色交互のラインが表現されている。また技法的には異なるが、表現が似た次の事例も変種として整理しておこう。たとえば、写真10は、織り耳の側には白、黒、赤の3色の8の字の縫いが施されているのに対し、裁断面の側には白と黒の幅の広い簡易的な縫い始末が施されていた。他には、写真11のように、ヘリンボーン状の編み紐が縫いつけられたものが1例だけあった。これは「チャルマ」(chalma)と呼ばれる、2人の作業者が必要なループ編みと縫いの混合的な技法によって施されたものである。

写真9.　縦横に色とりどりのトゥモルチャ・ティキシュが施されたジョイナマズ(ベシェルカク村、2022年10月31日撮影)

写真10.　織り耳側に3色のトゥモルチャ・ティキシュ、裁断面側に幅広の縫い始末が施されたジョイナマズ(ラバト村、2022年10月25日撮影)

写真11.　ヘリンボーン状の縁加工が施されたジョイナマズ(プルハキム村、2022年10月29日撮影)

(2) 整経にかかる技法

同じく2色交互のライン表現を特徴とする織り柄は、変種のものを含めてすべてのミフラーブのないジョイナマズに共通して見られるものだった。写真12のような単線的に表現された織り柄の

写真12.　ジョイナマズ用にトゥモルチャがたくさん織り込まれたタフト(クズルナウル村、2022年10月28日撮影)

写真13.　織り柄のブゾク・ティシが織り込まれたジョイナマズ(プルハキム村、2023年5月7日撮影)

「トゥモルチャ」を基本に、写真 13 や既出の写真 6 や写真 7 のような櫛状の織り柄もある。後者は「ブゾク・ティシ」（buzoq-tishi,「仔牛の歯」の意）と呼ばれ、クズルナウル村の製品にのみ見られた[13]。双方とも用いる技法は同じで、経糸を張る際に糸の配置に工夫を施すことで実現する。通常、経糸は仕上がりのストライプ幅に必要な本数の色糸を輪状に張るため、綜絖にかけた時の上下の経糸は必ず同色になる。この上下の糸を別の色に替えることで 2 色交互のラインを表現できる。具体的には、整経時に同じ色の経糸を一周させずに半周で色を替えてしまうのである。トゥモルチャの場合、4 目分ほどの経糸をこのように操作する。ブゾク・ティシの場合、単色の経糸の両脇にトゥモルチャと同様の操作をすることで櫛状のモチーフがあらわれる。

III. 牧畜民家庭のジョイナマズのデザイン的特徴

以上、大きく 4 種類の外見的な要素が、ボイスンの牧畜民家庭の自家製ジョイナマズの特徴として抽出できるものであった。本章では、その製法や使用法を念頭に置きつつ、彼らのあいだで認識されているジョイナマズの象徴的記号とは何なのかを検討したい。

まず、礼拝という使用の局面から考えてみよう。モスクのミフラーブ（壁龕）は信徒がキブラをむいて礼拝をおこなうためのものであり、今日のモスクには必須の要素である。ミフラーブの形や装飾、数に厳密な決まりはないものの、多くは 2 本の柱がアーチを支える門のようなスタイルをとる［羽田 2002a: 948; 2002b: 1002］。モスク以外の場所で礼拝をする場合には、信徒はふつう敷物に描かれた造形をメッカに向けて置くことによってモスクの壁龕と同等の機能を得ようとする。ゆえにミフラーブの本質とは、壁龕そのものやそれを模したアーチの造形にあるのではなく「キブラを示す」機能にあるのであり、その機能を果たす記号であればいかなる造形のものもミフラーブと解釈できよう。そうであれば、本稿であつかった牧畜民の自家製ジョイナマズにおける山型の縫いとり線や房飾り（および色数に差をつけたトゥモルチャ・ティキシュ）は、ミフラーブの一形態とみなすことができそうである。

さらに、山型の縫いとり線に関しては、ミフラーブ風アーチの造形の省略形なのではないかと筆者は考えている。事例にあったユコリ・マチャイ村の製品とクズルナウル村の製品を比較してみると、前者で見られた 1 つの山の縫いとり線はいかにもアーチの頂部を彷彿とさせるものである[14]。であるならば、後者で見られたジグザグの縫いとり線も複数の山の連なり、すなわち複数のミフラーブの造形と解釈してもいいかもしれない。その根拠は、かつての牧畜民の「集合的な」礼拝用敷物（サフサッジャーダ）に求めることができる。そこには雄羊の角のミフラーブが複数連続して描かれたことはすでに述べたが、ジグザグにいくつもの山の頂部を連続するように縫いとられた線は、複数のミフラーブの名残といえるのではないだろうか。複数人が 1 枚の敷物で同時に礼拝する習慣が現在も彼らのあいだに残っていることは、この仮説の蓋然性を高めるだろう。先述のように、ジョイナマズの準備／保管の局面から製作者の信仰のあり様を検討した今堀は、客人のもてなしの一環としてそれが備えられていることを指摘していた。この見解を援用すると、ボイスンの牧

13）織り柄のトゥモルチャの呼び分けは人によって異なり、単線のものもブゾク・ティシと呼ぶ者がいた。本稿では、クズルナウル村のなかでも腕利きの人物と目されていたインフォーマント Z（同村出身の 70 代女性）の呼び分けにならった。

14）筆者は、ボイスンの絨毯生産においてユコリ・マチャイ村はある種異質な位置を占めていると考えている。同村には「フナルマンド協会」（hunarmand,「手工芸」の意）の登録職人が多数暮らしており、販売を目的に現代的にアレンジされた製品が創作されている。詳しくは稿を改めて論じたいが、同村の製品は他村のものとは、配色やデザイン、技法、サイズなど明らかに異なる傾向をもっている。ゆえに、この 1 つの山型の線をともなう 1 人用のジョイナマズは、一般に流通している市販のジョイナマズをまねて、同村で新たに創作された製品デザインである可能性が高い点を指摘しておく。

畜民家庭の自家製ジョイナマズがほぼ大判サイズのものだった事実は重要である[15]。大判サイズのものが好んで作られる理由について、インフォーマントたちは概ね「団体の来客の需要に応えることができる上、折りたたんで使えば少人数の来客にも備えうるから」と説明した。要するに、大判サイズのジョイナマズは何人やってくるかわからない来客への備えであり、それは複数人が1枚の敷物で同時に礼拝をおこなう可能性があることを前提とした備えでもある[16]。ただし単に複数の来客への備えということであれば、1人用のジョイナマズを複数枚備えておくことでも対応可能なはずである。けれども、筆者が調査中にそのような場面に居合わせた限りでは、たとえ1人用のジョイナマズがその家にあったとしても、客人たちは各々が個別に礼拝をおこなうのではなく、大判サイズの敷物で同時に礼拝をおこなう選択をとるのが常だった。つまり、少なくとも筆者の調査地においては、複数人が1枚の敷物で同時に礼拝をおこなう習慣は現在も一般的なものとして受け入れられているといえる。以上のように、外見的な類似性と伝統的な慣習に鑑みると、牧畜民のミフラーブ風アーチのないジョイナマズにおけるジグザグの縫いとり線は、複数のミフラーブを象った記号である可能性が高い。

次に、製作工程の局面から考えてみよう。牧畜民の自家製ジョイナマズは、幅の狭い水平型の織機を用いて作られたものだった。細長いタフトから作られる敷物は、織り耳や裁断面に何らかの始末を施す必要がある。そのため、たとえばトゥモルチャ・ティキシュは、ジョイナマズ以外のふつうの敷物にもしばしば用いられる。同様に、織り柄のトゥモルチャも、写真14のように、シンプルな縞模様のコクマ・ギラムのアクセントとして広く用いられている。ゆえに、この縫いや織りによる2色交互のライン表現はジョイナマズ専用の記号とは言えない[17]。しかしながら、広域調査の際、筆者が「どこがふつうの敷物と異なるのか」をインフォーマントたちに尋ねると、彼らは決まって複数織り込まれたトゥモルチャを指した。既出の写真12と写真14は、織りあがったばかりのタフトだが、前者はジョイナマズのために、後者はふつうの敷物のために織られたものだった。筆者が訪問した際、たまたまこれらを織った作り手は留守にしていたが、ふだん絨毯作りに従事しない村人たちにとっても、写真12と写真14の用途（完成形）のちがいは一目瞭然のようだった。つまり、タフト上にたくさん（だいたい3本以上）のトゥモルチャが織り込まれていれば、それは

写真14.　ふつうの敷物用に2本だけトゥモルチャが織り込まれたタフト（クズルナウル村、2022年10月28日撮影）

15）インフォーマントZは、タフトの構成枚数と使用人数を次のように規定していた。すなわち、タフト3枚は1人用、7枚は3〜4人用、9枚は5人用、11枚は7〜8人用である。一概にこの値を標準化することはできないものの、どの村の作り手もたいていタフトの構成枚数によって仕上がり寸法を予想しているものである。言い換えれば、上述のZの規定は、複数人が同時に礼拝する可能性を前提としたものであり、実際にこのような大判サイズのジョイナマズを作りうる（作ってきた）ことを示唆している。

16）一方で、ブハラ州村落部で調査をおこなった今堀［2012: 58］は「二人用の礼拝用敷物は地区では珍しく、筆者が村落部で収集できたデータは一〇五枚中一枚だけであった」とし、唯一の2人用ジョイナマズに関して「大半の礼拝用敷物は一人用に制作されるが、この最大サイズの礼拝用敷物は二人が同時に礼拝できるように制作されていた。〔中略〕制作年代はおよそ一九四〇年代前半と推定できる。当時は一枚の礼拝用敷物で二人が礼拝する習慣があったことが分かる」［今堀 2012: 49］と記している。逆説的ではあるが、今堀の調査地の様子に照らすと、ボイスンの牧畜民家庭では大判サイズのジョイナマズが主流であり、複数人が同時に礼拝する習慣がのこっていることが明瞭である。

17）分布範囲は狭いものの、ブゾク・ティシはジョイナマズ以外の敷物に織り込まれている事例を見たことがないため、ジョイナマズ専用の織り柄と考えてもいいかもしれない。

ジョイナマズとみなされるのである。ただし、既出の写真 8 のように、織り柄のトゥモルチャの代わりに垂直方向にトゥモルチャ・ティキシュを施している例もあり、織り柄のトゥモルチャの本数は絶対ではない。むしろ彼らは、ミフラーブの機能を果たす山型の縫いとり線や房飾りなどの他の要素を加味して総合的に礼拝用敷物を識別していると考えた方がいいだろう。とはいえ、それらの技術的記号が仕上げ段階で付加できる要素であることをふまえると、たとえば余ったタフトから二次的にジョイナマズを仕上げることも一見可能そうである。しかしながら、筆者はそのような製品にであうことはなかった。写真 8 を除くすべての事例においてトゥモルチャは複数織り込まれていた。それは言い換えれば、作り手は、はなからジョイナマズを作るつもりで経糸を準備し、織り、さいごに上下を区別するための何らかの記号を付加しているのである。この製作工程の順序は逆戻しにすることはできず、遅くとも経糸を張る時点で作り手の頭のなかでこれから取りかかる手仕事の完成形はジョイナマズであることが定まっているのである。ゆえに、トゥモルチャという 2 色交互のライン表現はジョイナマズにひもづく最も象徴的な記号であるといえる。

縫いや織りによる 2 色交互のライン表現は、ジョイナマズに限らず、可動式住居を覆うフェルトカバーやサドルバッグの縁飾りなど、彼らの製品に多用されているモチーフである。この由来について、ソヴィエト民族学者の B. Kh. カルムィシェヴァは次のように述べている。すなわち、「これは、ヘビのシンボル[18] として、毛糸を色とりどり（特に黒と白）に撚ったり編んだりする、古くからの伝統にちなんだもので、それゆえ守護の意味をもつと考えられた」［Karmysheva 2000: 67–68］。つまり、ミフラーブの頂上を飾った雄羊の角のように、トゥモルチャもアニミズム的記号の 1 つと解釈できる。そうだとすれば、古来の遊牧民的な信仰文化が、1 日 5 回の礼拝用の敷物というイスラーム的物質文化の表面にあらわれているのだとみることができる。ゆえに、ミフラーブ風アーチのない礼拝用敷物もまた、かつての雄羊の角のミフラーブが描かれた遊牧民のジョイナマズと同様に、イスラームと草原の思想文化的共存／融合を反映する応用芸術とみなすことができるだろう。

むすびに

ボイスン郡のウズベク村落にみられるミフラーブ風アーチのない自家製ジョイナマズに施される技術的記号は、複数のミフラーブの名残であろうジグザクの縫いとり線、上下の識別をつけるのにしばしば用いられる房飾りのパプク、お守りの意味をもつ 2 色交互のラインを表現した縁飾り縫いのトゥモルチャ・ティキシュ、同様の意味と表現をもつ織り柄のトゥモルチャの 4 種類があることがわかった。これらの技術的な記号はたいてい複合的に付与されるものだが、とりわけ 2 色交互のライン表現を特徴とするトゥモルチャは、他の製品にも施される点でジョイナマズ専用の記号とはいえないものの、その浸透の度合いと製作工程の初期段階に施される点でジョイナマズにひもづく

18）『芸術百科事典――ウズベキスタンの伝統的芸術の関連用語（*Badiy entsiklopediya: O'zbekiston an'anaviy san'ati atamalari*）』［Gyul' 2023］の「イロン」（ilon, ヘビ）の項目で、S 字形の装飾モチーフについて解説したギュリ［Gyul' 2023: 91］によれば、水や豊穣の古典的シンボルであるこのモチーフは「お守りのように、邪視除けの機能も備えていた」とある。しかしながら、何故ヘビの象徴（モチーフ）が守護的な意味合いをもつと考えられているのか、その説明を筆者はこれまでのところ見つけられていない。とはいえ、絨毯のモチーフとして広範に見られる狼やその足跡と同様に、人にとって恐怖／害悪をもたらす存在の象徴をあえて身につけることによって、災厄（そのきっかけとしばしばみなされる邪視）を跳ね返そうとする心理がはたらいた結果であろうと筆者は推測する。その根拠は、このような「毒をもって毒を制す」心理は世界中に散見される普遍的現象であるだけでなく、筆者の現地滞在中の印象に拠るところが大きい。というのも、ヘビについて時折警戒するように住民から注意喚起があった一方で、それを崇拝の対象とみなすような言動は一切みられなかったためである。もちろん、家畜を襲う狼と同様、それを忌み嫌う感情とは裏腹に畏怖の念を抱かせる対象として、やはり守護的な存在とみなされた側面も否定できるものではないだろう。とりわけヘビの鋭い目つきは邪視に対抗するパワーを宿すように感じられる。

第一の記号であるといえる。縫いや織りによる2色交互のライン表現は、イスラームではなくアニミズム信仰にもとづくものと考えられている。言い換えれば、ボイスンの牧畜民が作るミフラーブ風アーチのない礼拝用敷物は、1日5回の礼拝というムスリムの信仰実践を支えるモノの上に遊牧的な信仰文化の表象を描いた、イスラームと遊牧的な思想文化の共存を反映する応用芸術であり、それらは「祈り」という普遍的な営みを軸に柔軟につながれたものである。

本稿でとりあげたミフラーブ風アーチのない礼拝用敷物は、あくまでボイスン郡村落部という限られた地域に見られる事例であった。他の地域においても似たようなジョイナマズが作られているのか、本稿で明らかとなった特徴がウズベク牧畜民のものづくりとして一般化できるものなのかどうか、現時点では不明である。この点について今後さらなる調査研究が必要であろう。さらに、地理的な範囲を広げるだけでなく、これらの製品がいつ頃から作られるようになったのか[19]、時間軸を明らかにすることもまた重要である。なぜなら、ウズベキタンの半遊牧民は19世紀から20世紀にかけて次第に定住化したといわれているものの、その経過については未だ明らかでない点が多いからである。彼らの物質文化にみられる変容をたどることにより、ウズベク牧畜民の定住生活様式の受容という研究課題を解明できるかもしれない。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP 22KJ1939の助成ならびに松下幸之助記念志財団の2021年度日本人留学助成〈松下幸之助国際スカラシップ〉(A21-08)を受けたものです。ここに記して御礼申し上げます。

引用文献

＜日本語文献＞

a. 単行本

杉村棟 1995『絨毯――シルクロードの華――群馬県立歴史博物館第50回企画展』朝日新聞社.

b. 論文

淺村卓生 2018「第33章 ウズベク語――国家表象としての標準語と文字」帯谷知可(編)『ウズベキスタンを知るための60章』(エリア・スタディーズ164)明石書店, pp. 218–222.

今堀恵美 2012「ウズベク・ムスリムにおける礼拝用敷物とイスラーム信仰実践」『イスラーム地域研究ジャーナル』4, pp. 46–58.

c. 翻訳論文

ウマロヴァ, グルバホル 2015「ウズベキスタンのマハッラ――社会自治組織としての発展の歴史」(樋渡雅人訳)『地域経済経営ネットワーク研究センター年報』4, pp. 147–155.
<http://hdl.handle.net/2115/58408>

d. 辞書・事典

梅村坦 2005「テングリ」小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹(編)『中央ユーラシアを知る事典』平凡社, p. 371.

杉村棟 2002(2013)a「じゅうたん」日本イスラム協会・嶋田襄平・板垣雄三・佐藤次高(監修)『新イスラム事典』平凡社, 初版第4刷, pp. 275–276.

――― 2002(2013)b「ミフラーブ」日本イスラム協会・嶋田襄平・板垣雄三・佐藤次高(監修)『新イスラム事典』平凡社, 初版第4刷, p. 473.

19) ギュリらの学術調査で記録されたものは、1960～80年代に作られたものだった［Gyul' 2019: 176］。

羽田正 2002a「ミフラーブ」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店, p. 948.

――― 2002b「モスク」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店, pp. 1002–1005.

松村明（編）2008「じゅうたん」『スーパー大辞林 3.0』三省堂（書籍版『大辞林 第三版』の増補・編集した辞書アプリ）.

森伸生 2002「キブラ」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之（編）『岩波イスラーム辞典』岩波書店, p. 307.

＜英語文献＞

a. 単行本

Gyul, Elmira. 2023. *Art Encyclopedia: Terms Related to the Traditional Art of Uzbekistan*. Tashkent: Zamon-press-info nashriyot uyi.

Kaffel, Ralph. 1998. *Caucasian Prayer Rugs*. London: Laurence King.

Khakimov, Abdullayevich and Elmira Gyul. 2006. *Boysun: Atlas of Artistic Crafts*. Tashkent: UNESCO.

The Fine Arts Scientific Research Institute of the Academy of Arts of Uzbekistan & The «Boysun» Culture and Art Support Fund (eds.), 2005. *History and Traditional Culture of Boysun: Review of the Boysun Scientific Expedition*. Issue 2. Tashkent: UNESCO.

b. 論文

Dixon, Jim. 1998. “Design and Symbolism,” In Ralph Kaffel (ed.), *Caucasian Prayer Rugs*, London: Laurence King, pp. 156–161.

Gyul, Elmira. 2005. “Carpet Weaving,” In The Fine Arts Scientific Research Institute of the Academy of Arts of Uzbekistan & The «Boysun» Culture and Art Support Fund (eds.), *History and Traditional Culture of Boysun: Review of the Boysun Scientific Expedition* Issue 2, Tashkent: UNESCO, pp. 248–257.

＜ロシア語文献＞

a. 単行本

Gyul', Elmira. 2019. *Kovry Uzbekistana: istoriya, estetika, semantika*. Tashkent: Art Flex.

Karmysheva, Bel'kis Khalilovna. 1976. *Ocherki etnicheskoi istorii yuzhnykh raionov Tadzhikistana i Uzbekistana (po etnograficheskim dannym)*. Moskva: Izdatel'stvo “Nauka” Glavnaya redaktsiya Vostochnoi literatury.

Moshkova, Valentina Georgievna. 1970. *Kovry Narodov Srednei Azii kontsa XIX – nachala XX vv*. Tashkent Izdatel'stvo “FAN” UzSSR.

Myasina, Vera Anatol'evna. 2019. *Dekorativnye vyshivki Uzbekistana i Tadzhikistana XIX – XX vekov v sobranii Gosudarstvennogo muzeya Vostoka: Katalog kollektsii*. Moskva: Gosudarstvennyi muzei Vostoka.

b. 論文

Karmysheva, Bel'kis Khalilovna. 1980. “«Kochevaya step'» Maverannakhpa i ee naselenie v kontse

XIX – nachale XX vv.," *Sovetskaya etnografiya* 1980(1), pp. 46–55.

———. 2000. "Osnovnye vidy perenosnogo zhilishsha uzbekov." In G. P. Vasil'eva (ed.), *Kochevoe zhilishshe narodov Srednei Azii i Kazakhstana*. Moskva: Izdatel'stvo Nauka, pp. 50–78.

＜ウズベク語文献＞

a. 単行本

Gyul', Elmia. 2023. *Badiy entsiklopediya: O'zbekiston an'anaviy san'ati atamalari*. Tashkent: Zamon-press-info nashriyot uyi.